

ジェームズ・アンソール展 ～ベルギーが生んだ異端の巨匠、20余年ぶりの回顧展～ 2005年6月18日[土]－7月24日[日]

ベルギーの近代美術には3人の巨匠がいます。ルネ・マグリット、ポール・デルヴォー、そしてジェームズ・アンソールです。前者二人に関しては、国内で何度も展覧会が催されたため、彼らの作品を一度は目にされたことがあるかもしれません。しかしアンソールについては、一体どのような画家であったのか、具体的なイメージがわからない方もいらっしゃるでしょう。

アンソールを理解するには2つのキーワードが有効でしょう。それは「グロテスク」と「仮面」です。

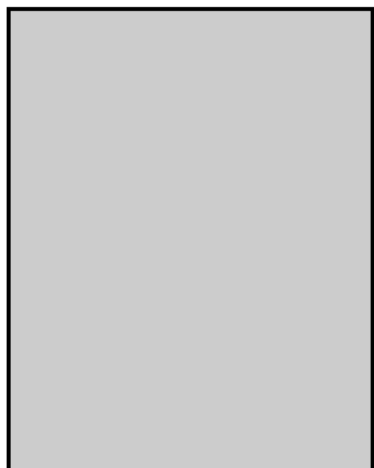
「グロテスク」と聞けば、何だか味が悪いものと考えがちですが、例えばアンソールは、「画家はあまりに確実な技術による影響や拘束や安易さから解放された時、事物の様相を、常に力強く多様な、常に新しいものにすることができるといえるでしょう。その時こそ、その作品は純粹で美しく、われわれの思想、われわれの悲哀や喜びを反映するにちがいないのです」というような言葉を残しています。これを読めば、アンソールが興味本位や刺激を追求するためだけにグロテスクな作品を描いたのではないことが、お分かり頂けるのではないのでしょうか。またアンソールのグロテスクな作品には、ブリューゲルやボツシュといったヨーロッパの北方絵画の巨匠からだけでなく、日本や中国の美術からの影響が確認できます。展覧会では特に葛飾北斎の『北斎漫画』とアンソールによるその模写などを比較することで、日本の美術がどのように彼の作品の中に吸収、発展されたのか、実感して頂けることでしょう。

「仮面」はアンソールの絵画におなじみの小道具です。登場人物たちは不気味な仮面をかぶることで、新たな人格をまとい、日常生活の中で背負っている様々な役割を脱ぎ捨てたかのようです。不思議なことに、アンソールの絵画では仮面は本心を隠すためのバリアーとして機能していません。逆に、仮面をつけることで、私たちの奥底に潜む本性があらわになるかのようです。

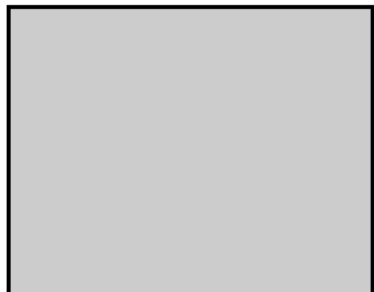
本展は、アントウェルペン王立美術館をはじめ、アンソールの生地オーステンド市立美術館など国内外の美術館から集めた約140点で構成されます。画家の代表作が一堂に会する絶好の機会です。お見逃しのないように。(ly)



《花飾り帽子をかぶった自画像》1889-89年頃
オーステンド市立美術館蔵



《シノワズリー》1885-86年 アントウェルペン王立美術館蔵



《仮面と死神》1897年 リエージュ市立近現代美術館蔵